



武蔵野

埼玉大学図書館 2010年2月5日 4号



情報技術のめざましい進歩・発展は、各種書籍・資料情報の電子化、デジタル化を急速に押し進めています。世界中の書籍を電子情報として公開するとの Google の企図は、著作者・出版界を中心に大きな波紋を広げています。自然・人文・社会のあらゆる科学領域の研究成果・論文も電子媒体に載せられ、電子ジャーナルとして蓄積・保存されています。しかも、これらのジャーナル・

情報は、商品化され、一部の企業が独占的に取り扱い、寡占化、高価格化が進んでいます。研究者にとって、利便性は高まりましたが、問題点もまた指摘されています。今回は、西洋史、とりわけ中世フランスにおける「国家史」叙述の生成・変容過程に関する研究を進めていらっしゃる鈴木道也先生に「歴史資料のデジタル化の現状」についてご執筆いただきました。

歴史史料デジタル化の現状 —過去の記録は誰のものか—

鈴木道也（教育学部准教授）

AmazonのKindleや最近発表された iPad によって、今年はデジタル化された雑誌や書籍、いわゆる電子書籍が急速に普及するのではないかとされている。電子書籍は紙を媒体とする従来の書籍に比べ制作コストや所蔵スペースを大幅に削減できるから、期末テストまでの短い付き合いになることが多い大学の教科書などにはうってつけかもしれない。

しかし、情報の流過程を大きく変えるであろうこうした電子書籍の普及が、社会にどのような影響をもたらすのか、その方向性はかならずしも明確ではない。インターネット普及期から叫ばれていた紙媒体の危機が、いよいよ現実のものとなるのだろうか。図書館や出版社が所蔵する膨大な書籍をスキャンして閲覧者に提供するGoogleの書籍検索サービス「Googleブック検索」が、著作権の在り方を巡って現在大きな問題を引き起こしているのも、そうした危機感の現れであろう。

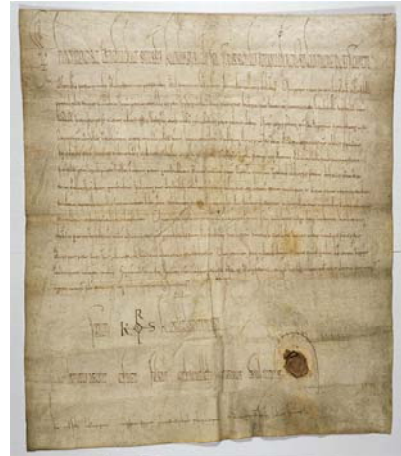
この問題に関して『ニューヨーク・レビュー・オブ・ブックス』（後に『ル・モンド・ディプロマティーク』に転載）に文章を寄せたフランスの歴史学者ロバート・ダーントンは、公共知とも言うべき過去の膨大な著作物が、デジタルテキスト・データベース化を通じて一営利企業の手握られてしまうことの危険性について語っている。以下では、筆者が専門とする中世フランス史研究の現状を例に、史料がデジタル化されることの意味についてすこし考えてみたい。

デジタル化の現状

現在インターネット上には、デジタルテキスト化された無数の文献データ（画像とテキスト）が公開されているが、フランス史に関しても、国立図書館が展開する文献デジタル化プロジェ

クト「ガリカ<Gallica>」によって、およそ百万点の所蔵文献が画像データとしてデジタル化されている。また中世史料研究で中心的な役割を果たしている歴史史料研究所（IRHT）は、教育省と協力してパリのサント・ジュヌヴィエーヴ図書館に所蔵されている中世装飾写本の画像データベースを完成させており、その成果は中世百科全書の名にちなんで『花々の書<Liber Floridus>』（<http://liberfloridus.cines.fr/>）と題された美しいサイトで確認することができる。

とはいえ、校訂が済んでいない中世写本のデジタルテキスト・データベース化は、一部の文学作品を除けば必ずしも順調に進んでいるとはいえない。その原因としては、入力と校正に要する手間と経費の問題、あるいはテキスト情報の全てをコード化することの難しさといった技術的な問題を挙げることができる。それでも、規模は小さいが精力的なくつかの研究グループの献身的な努力により、特筆すべき業績も現れてきている。パリのサン・ドニ修道院で13世紀に編集されたラテン語の年代記をデジタル化しているフランス国立古文書学校（<http://elec.enc.sorbonne.fr/chroniqueslatines/>）、同じく13世紀に纏められたラテン語百科全書『知識大鑑』を全文検索可能なかたちで公開しているナンシー大学（<http://atilf.atilf.fr/bichard/>）、あるいはアーサー王伝説の一部を構成するクレティアン・ド・トロワの著作『荷車の騎士』を記す8点の写本に関して、その全文を公開しているナント大学（<http://palissy.humana.univ-nantes.fr/CETE/CETE.html>）などはその好例である。



国王から修道院に与えられた
特権証書の例

国立古文書学校がここ十年近く進めている「『白のカルチュレール(Cartulaire blanc)』デジタルテキスト化プロジェクト」もこうした活動のひとつである。「(白の)カルチュレール」とは、中世フランスを代表する大領主であったサン・ドニ修道院が、自らの所領に関わる過去の特権証書をひとつにまとめたものである。プロジェクトの成果はすでにその一部が国立古文書学校のサイト上で公開されている（<http://elec.enc.sorbonne.fr/cartulaireblanc/>）。そこには、個々の証書についての基本データだけではなく関連する所領地図や年表も添えられ、さらに証書全体に対する用語検索機能も備えるなど、証書集に関する総合的なデータベースの構築を目指している様子がうかがえる。

このようにしてデータベース化された証書集をひとつのコーパスと捉え、その統計学的・言語学的分析を進めていくことは充分可能であり、最近ではマーケティングの現場で発達してきたテキスト・マイニングも取り入れられてきている。アンケートの自由記述欄などに込められた顧客の指向を統計学的に抽出しようとするテキスト・マイニングの手法が、歴史研究でも試みられているのである。イタリアのフランコ・ランチア教授が開発したT-Lab（ラテン語史料に対してはT-LAB Pro Lingua Latina）というソフトウェアを用いれば、統計学の素養がそれほどなくても、特定の史料中での複数単語間の相関や共起関係、特定の単語の使用頻度あるいは語形の変化などを容易に分析することができるようになってきている。

ひとつの「闘い」としてのデジタル化

ところで、過去の証書を転写してひとつにまとめたカルチュレールは、証書の目録と呼んでも差し支えない性格を有しており、中世人にとってみれば、それは一種のデータベースであった。したがって現在進められている作業は、いわば中世証書データベースの再データベース化

であり、作業そのものが、ややおおげさに言えば、記録情報の管理に関わる中世のアーキビストと現在のアーキビストの、あるいは中世と現代の歴史家たちの情報管理法の違い、さらには彼らの歴史認識の相違について考える材料を提供してくれるように思われる。またデジタルテキスト化は、必然的に対象となる歴史史料を文書館、そしてアカデミズムの枠から広く全世界に開放していくことになるが、それは（広く歴史研究に携わる者という意味での）現代の歴史家と史料との関係を大きく変えていく可能性をもっている。

こうした可能性を意識して、プロジェクトの遂行責任者である古文書学校教授O. ギュヨジャンは、中世写本のデジタルテキスト化に際して次のような基本原則を定めている。

- ①accessibilité : 史料テキストへの多様なアクセス方法の提供
- ②interopérabilité, pérennité : 電子化されたテキストの生命力の確保
- ③automatisation : データ入力作業における簡便性と連続性の確保
- ④contextualisation : 史料テキストのコンテキスト性の重視
- ⑤gratuité : 史料テキストデータ利用における無償性の保障



デジタルテキスト化された『白のカルチュレール』

①から⑤に一貫しているのは、史料の一体性を保持しつつ、その開放性を高めていこうとする強い意思である。②に関していえば、入力され公開されたデジタルデータは狭い研究者集団のなかで消費されるものではなく、将来に渡って歴史学界で共有できる恒久的な価値を持つことが望ましいとされている。したがって、データベースシステムの構築にはできる限りオープンソースソフトウェアを用いるとともに、史料テキストならびに史料情報の記述にあたっては、国際的な基準に沿ってDTD（文書型定義：Document Type definition）を明示した上で、XMLなどのメタ言語を用いている。メタデータ化の指標となるのは、ネット上の情報資源を体系化する際に必要となる基本要素についての国際基準、「ダブリン・コア（Dublin Core Metadata Element Set）」である。こうした配慮によってデータの検索

効率を高めるとともに、外部とのデータ交換を容易にすることが期待されている。

プロジェクトメンバーは、史料及び関連データを「国家が責任をもって公開し、すべての人に等しく、そして常に開放されるべき公共財」とみなしており、ギュヨジャンも「オープン・ソースの原則に従って、われわれがデジタルテキスト化に際して開発した全てのソフトウェアは、同様のデータベースの構築に際して無償で用いることが可能である」と述べている。彼らのこの決意は、デジタル化プロジェクトの遂行を困難にするものが単なる手間と経費の問題ではないことを示している。それは、閉じられた記録に安住してきたこれまでの歴史家たちに対するひとつの「闘い」とも言えるものであった。

開かれた記録、閉じられた記録

自らの所領を管理するためにカルチュレールを制作した中世の修道士たちは、史書の編纂にも携わる歴史家でもあった。中世フランスを代表する歴史書『王の物語』は、彼らの手によって生み出されている。彼らは年代記というスタイルで、また時にはカルチュレールを用いて、不確かであいまいで、それゆえ多様であった人々の記憶=記録を効率的に定型化していった。

彼らは現代のアーキビストにも通じる鋭敏な分析能力を発揮していたが、記憶=記録の管理者にして利用者であるという点において、記録管理の公平性・公開性については大きな限界を抱えていた。

もっとも、修道院の政治的社会的影響力が絶対主義期に向けて次第に低下していくなかで、歴史もまた、閉じられた空間に籠もる教会歴史家の独占物ではなくなり、俗人歴史家（大学人、法律家、地方名望家など）が新しい記録=情報を求めてさまよい始めることになる。しかし、こうした新しい歴史家たちが苦労して手に入れた多様な記録=情報は、近代国家形成期に整備された文書館のなかに収められることで、再び閉じられてしまったように思われる。



フランス国立古文書学校

今回紹介した国立古文書学校の試みは、この閉じられた「記憶=記録=情報」を、あらためて開放しようとするものであり、同様のプロジェクトが現在各国で精力的に進められている。歴史史料のデジタル化は、歴史データの流通過程を飛躍的に効率化しつつあり、その結果、これまでどちらかといえば徒弟制的教育環境のなかで成果を蓄積してきた史料研究が、開かれたネットワークでの協同と分業を経験することで、より豊かに発展していく可能性も生まれている。

しかし他方で、ネット上に公開されている膨大な量の歴史史料データベースへのアクセスが、国籍や立場の違いを問わず全ての人にとって可能であるとすれば、あるいはダーントンが恐れていたように、特定の企業がこのアクセス権限を独占的に管理するようになれば、いずれにせよそれは、これまで個と共同体を成り立たせてきた伝統的で歴史的な「記憶=記録=情報」の意味を低下させかねない。そうなれば集合的記憶そのもの、あるいはそれを通じた共同性の再生産といったものを課題として常に抱えてきた歴史学も、深い再検討を迫られることになるだろう。デジタル化された史料を求めてネットをさまよう21世紀の歴史家たちは、はたしてどこに辿り着くのであろうか。

けやきの窓

私の推薦図書 経済学あるいは社会科学を勉強しようとする人を主に念頭に置いて、僕の経験からお薦めする本を挙げます。科学の方法というのでしょうか、因果関係を徹底して追いなさいという精神を学んだのは、大学1年生で読んだエンゲルス『フォイエルバッハ論』（岩波文庫）でした。現在出ている経済学の教科書から1冊だけとなれば、伊藤元重『入門経済学』（日本評論社）を僕は挙げます。経済学の考え方が比較的良好にわかると思うからです。もっとも、分野によらずどの教科書にもわかりやすい部分

とわかりにくい部分があるから、1冊ではなくて2～3冊読んでみるのがコツだとも言われます。僕も賛成です。また社会科学は理屈だけではだめで、現実と突き合わせなければ意味がありません。その点では、自分の本で気が引けますが『日本の経済』（中公新書）に現在の経済問題の可能な限りわかりやすい入門を書きました。その他、経済小説や歴史小説を読むのもいいですよ。

（経済学部長／教授 伊藤 修）

「図書館と県民のつどい埼玉2009」

—「デカンショ」と「フェアブル」—

去る平成 21 年 11 月 28 日（土）埼玉県図書館協会主催による「図書館と県民のつどい埼玉 2009」が浦和コミュニティセンター浦和パルコ/コムナーレ 10 階で開催されました。これは、文字・活字文化の日（10 月 27 日）制定を記念し、図書館サービスの一層の向上と読書活動のさらなる推進を図るため、県民とともに図書館のあり方を考えるためのイベントです。記念講演、参加型の分科会、実技指導のほかに、大学図書館・高校図書館・公共図書館の部に分かれて展示しました。埼玉大学が参加した大学図書

館の展示は、「太宰治からフェアブルまで～大学図書館のお宝お見せします～」というテーマで、跡見学園女子大学・国立女性教育会館・城西大学・女子栄養大学・聖学院大学・文教大学・立教大学・立正大学と合同で行いました。各大学の特色を出した企画展示が行われ、本学からは、「官立浦和高等学校記念資料室オープニング記念展示」として当時読まれていたであろうデカルト、カント、ショーペンハウエルの著作物と、「フェアブルコレクション」を出品したところ、たいへん盛況でした。



官立浦和高等学校蔵書「デカンショ」コーナー



「フェアブル・コレクション」コーナー

このイベントは、平成 19 年から始まったもので今年で 3 回目になります。第 1 回は、平成 19 年 10 月 27 日（土）に、さいたま市民会館うらわを会場として、午前中に記念講演を、午後に参加型の分科会と実技指導が行われました。第 1 回で知られていなかったこともあり、参加者は 696 名（延べ人数）でした。第 2 回は、平成 20 年 11 月 1 日（土）に開催され、会場は、記念講演と参加型の分科会をさいたま市民会館うらわで、展示と実技指導を浦和コミュニティセンターという 2 箇所に分かれて行われました。第 2

回から展示が始まり、この方法は、第 3 回と同様のものです。参加者（延べ人数）は、1513 名と第 1 回に比較して増大しました。そして第 3 回は、会場を 1 箇所にして、多くの方にこのイベントが知られたことから、参加者は 1730 名（延べ人数）とまた増大しました。第 4 回は平成 22 年に開催される予定ですので、まだ見たことが無い方はもちろんですが、今年来られた方も是非また見に来てください。

（利用サービス係長 小野寺 伸）

「埼玉県大学・短期大学図書館協議会」研修会報告

2009年12月9日、埼玉大学理工研究課棟において、「埼玉県大学・短期大学図書館協議会（SALA）」の研修会が行われました。この研修会はSALAが、会員館の業務改善や向上を図ることを目的として毎年開催しており、今年は第21回を迎えました。

現在、大学図書館は予算や人員の削減、外部委託の導入など、運営の危機にさらされています。また、Googleなどの検索エンジンの発展やデジタル環境の進展に伴い、学術情報におけるメディアの変容には著しいものがあります。そこで今回は、図書館の原点に立ち、「レファレンス」をテーマに、これからの大学図書館のあり方の核とは何かを

探りました。

最初に、(財)大学コンソーシアム京都（同志社大学所属）の井上真琴氏より、「レファレンス能力を高める選書という行為」というテーマで、選書能力・情報評価能力の育成や、選書した資料のレファレンス現場への活かし方について具体的に講演していただきました。



次に、城西大学水田記念図書館の関口千登世氏より、「図書館ガイダンス事例報告」として、新入生オリエンテーション、ガイダンス、データベース講習会などの実例と、ガイダンスアンケ

ートの回答を、担当者や教員とのコミュニケーションによって活かしていく取り組みが紹介されました。

さらに、NIIの米澤誠氏から「あらためて大学図書館のレファレンスを考える」と題して、情報の獲得行動の変容にともなう情報リテラシー教育としてのレファレンスや、大学生の新しい学び方について講演していただきました。

最後に、県内外の25校2機関から参加した58名の図書館員が、講師陣と自由活発に質疑応答し、業務への新しい視点と活力を得た研修会となりました。

*講演要旨は『SUCRA』に掲載されています。

(SALA広報担当 湊 伸子)

ホームページがリニューアルされます！

埼玉大学図書館Webサイトをリニューアルさせていただきました、工学部電気電子システム



また僕だけではなく、多くの学生がこのよう
な経験を出来るように、大学から色々とアプ
ローチをかけてもらいたいと思いました。経験す

工学科4年渡邊雄と
いいます。今回の経
験は僕にとって大き
なものであり、この
ような機会を設けて
下さった図書館の方
々に深く感謝申し上
げます。

ることによって学生は成長でき、大学は学生の
意見というものを直接感じとることが出来るは
ずです。お互いの成長のために、大学と学生
が共に何かをしていくというのは重要だと思
います。また、学生は多くの経験をするためには
自ら動かないといけません。機会を与えてもら
うのを待つのではなく、自分から機会を求めて
いってほしいです。なぜなら求めに行くことも
経験になるはずだからです。

以上となりますが、埼玉大学図書館Webサイ
トに携わらせていただきありがとうございます。

(工学部4年 渡邊 雄)